広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	文字(ひらがな)と音との照合 : 文学学習の入門期指導
Author(s)	飯住, 良夫
Citation	児童の言語生態研究 , 9 : 37 - 41
Issue Date	1978-06-08
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045103
Right	
Relation	

五十二年度本会公開授業記録

授業レポート（一年生）

文字（ひらがな）と音との照合

――文字学習の入門期指導――

飯住良夫

1. 授業案

一、日時　昭和五十二年五月二十五日（水）
　　午後一時三十五分～二時十五分

二、児童　横浜市立汐見台小学校一年三組
　　男子二十二名、女子二十名
　　計四十二名

三、学習領域　用具言語

四、授業テーマ
「文字（ひらがな）と音との照合）
　　― 文字学習の入門期指導 ―

五、授業テーマ設定の理由とその扱い

(1)　日常の子どもたちの会話は、たいへん活発であるし、会話を中心にして生活していると言っても過言ではない。わずかな時間の内に聞こえてくる会話も、多種多様、多岐にわたる音声を駆使して行なわれていることがわかる。

　文字については、自分の氏名はもとより、豊富に書けるようになっている。しかし、文字表記（ひらがな―以下文字はひらがなに限る）については、五十音は、入学前に書けるようになってはいるが、習得の手だてが、種々雑多である。

(2)　文字表記による言語活動の入門期にあたるこの時期には、文字表記が、それまでの音声言語の体験をふまえた上で、習得されることが望ましい。つまり、文字は、音声言語とは別にあるものではなく、自分の音声を、文字という図形をかりて表現するところに、その意味を持つからである。

(3)　活発な音声言語を駆使している子どもたちに、文字表記の習得を期待する場合、何より考慮しておかなければならないことは、文字表記が一字表記をもって一音を表現するという原則を持っていることであろう。

　子どもたちは、音声言語の習得にあたって、聴覚からのイメージによったり、音のつながりの誤りを指摘されたりしてきたのであろうが、まとまりとしてつかまえているようすもうかがえる。つまり、一音一音の音節を意識しているのではなく、たとえば、依頼は、「ください。」というまとまりとして意識しているようである。（聞きなれないことばに対して、音の順が錯綜してしまう。―とだな↓となだ）

　このような音声言語の体験に対して、文字表記の習得のためには、連続音を、一音（音節）に区切ることが要求される。

　音声言語を、音節を意識して聴音することと同時に、文字表記が習得されなければならない。さらには、将来、語・文・文章と文字言語の活動領域に発展し、正しく、意味変化に対応できるようになるためには、この文字表記の入門期にあたり、ことばは、音節に区切れ、音節の組み合わせによって意味変化を生むことを知らせることが、たいせつである。

(4)　文字表記の学習は、読字と書字があるが、本単元においては、読字を中心とし、書字については、視覚（図形認知）の面と、手工（運筆・筆順）の面とを考え、別単元として指導する。

(5)　文字表記の内、漢字の扱いは、音に意味を持たせようとする日本語の音感の特質から考えて、別の指導とする。

(6)　本学級には、視覚・聴覚障害の子は、いない。

六、指導目標

①音声言語を、単音に区切って、文字表記できるようにする。

②単音の組み合わせ・連続として、聴音し、文字表記できるようにする。

③単音の組み合わせ・連続による意味変化に対応できるようにする。

七、指導計画（六時間扱い）―（但、日常化定着化をはかるため、短時間で回数多く扱う。）

(1) 読字調査をする。（氏名等）

(2) ことばを音節に区切り、組み合わせる練習をする。（本時）

(3) 文字表記できた音節を整理する。（特別な表記の約束も含む。）

(4) 音節の組み合わせによって、単語を構成する練習をする。（体言・用言別）

(5) ひとりごと作文を書く。

(6) ことば遊びをする。

八、本時授業形態　担任及び児童の言語生態会員による共同授業

九、本時目標

友だちや自分の名前を材料にして、二～四音の音節の区切りや組み合わせができるようにし、音節の組み合わせによって、ことばができていることを知る。

十、本時の展開

学習活動	指導上の留意点
○学習開始のあいさつ ○学習の課題・方法を知る。	○学習課題を、方法を中心に知らせる。
I　り　→もり→もな もな	○二音節に区切れるかを調べる。（「もな」は女児名） ●「モリ」を区切れている子は、「リ」「ナ」の移行が可能。 ●「モリ（森）」のイメージで音をとらえている子は、「ナ」への移行が困難。
II　りのこ→りのこ のりこ ← まりこ	○二音節に区切れたら、三音節に区切れるかを見る。 ●どのカードの段階で「の・り・こ」がつくれるか。 ○のをまにかえて、「まりこ」ができるか。 ●三音節区切りの確認のために行なう。 ●音感のイメージが、「のり（食用・糊）」「まり（球）」にならず、音節として、「の・り」「ま・り」と区切れているか。
III　しいだ→いしだ ← いいだ	○清音三音節の区切りができたら、清音同音の連続が、区切れるかを見る。 ●「いいだ」の音が、Aイダ　Bイーダ　Cイイダのうち C で区切れているかを「し」を「い」にかえられるかで見る。
IV　すみい→いすみ ← いいすみ	○清音同音二音連続が二音節になっているかの確認（長音との区別で音節が意識できているか。） ●イーズミとイイズミ ○三音節が区切れたら区切った音節が組み合わせ可能な音節として意識できているかを見る。 ●「やまだ」→「やま・だ」「や・まだ」になっていないか。マとダが音節として意識されていれば、二音の間に、ス・ツが入れられる。 ●さらに、三音が独立していれば、ダをキにかえることができる。 ○三音節の中の撥音が音としてとれるか。 ●ンが、セン（線）としてではなく「セ・ン」と独立していれば、セ→ゴへの移行が可能。
V　まだ□→やまだ ← まずだ まつだ ← まつき	
VI　せ□だ→せんだ ごんだ	

Ⅶ	いがわ→いながわ	○今までの三音節区切りが、四音節区切りに移行可能かを見る。
Ⅷ	□かむら→ わ な	○四音節区切りが、三音節をふまえてできるか。
Ⅸ	ゆうこ→ゆうじ ← りゅうじ	○四音節区切りが、ウ段長音においても可能か。（長音音節）
Ⅹ	すみ□れ わすれ→わすれ	○四音節区切りが、長音においても可能か。 ○今までの音節意識が品詞別の意味変化に対応できるかを見る。
Ⅺ	い が た（カードを組み合わせて、ことばをつくる遊びをする。）	○今までの音節意識が組み合わせが自由になるほどに定着しているかを見る。 ●予備カード 「とんぼ」「だるま」「けいこ」「けいと」「くるま」「わたし」「せんだ」「どんだ」「しいたけ」「いうなよ」

※絵かき歌の歌詞を書く。

※数字の読み方の文字表記に従って発声する。

○音節意識の応用（自分の発声と文字の対応）

○文字に音声をあわせる。（文字表記による発声のちがい）

○フラッシュカードの文字を読み、意味把握して、行動する。

○学習終了のあいさつ。

十一、評価と診断

◎聴音したものを、単音節に区切り、組み合わせによってできる意味変化に対応できたか。

●発音不整の者はいないか。

●文字を読んで、意味が把握できたか。

2. 授業記録

T きょうは、あいさつをしてくれる人は、いるかな。

C えっ。勉強するの？

＜学習開始のあいさつ＞

T きょうの時間は、国語の勉強をします。きょうは、字と声の勉強で、これから、いろんな字を出します。その字を組み合わせると、だれかさんの名前になります。じゃ、はじめは、これです。

＜Ⅰのカードを提示＞

＜間髪を入れず＞

C もり、もり、もりくん。

C りもくん。

T わかった人はね。だまって手をあげてください。自分だなと思う人は、立ってください。

＜森君起立＞

T このままで、もりくんになりますか。

C 反対にする。

T それでは、字をひとつだけ入れかえて、もりくんを、他の人に変身させてください。

C あっ。わかった。

C あの人だよ……。

C のりくんだ。（飯田のりひろ君のこと。）

T そうだね。まだ、いるよ。どっちかの字を、なんかの字にとりかえたら、自分だよという人は、手をあげてください。

C だれになるのかなあ。

C りをなにとりかえると……。

C もなだ。（もなは、女児名）

T そうだね。もりから、りをとって、なにかえてしまうともなちゃんにへんしーん。できたね。こんなふうにやるんだよ。それでは、つぎのは……。

＜Ⅱのカードを提示＞

C のりこ。のりこ。

T さあ、わたしだっていう人は、いるかな。

＜典子起立＞

T どうして、のりこになるのかな。このままじゃ、わからない人いるらしいね。

C あのね。のから、読んじゃったの。

T それじゃ、のとりを切りはなしちゃおうか。＜鋏で切る＞

T こは、どこにいれたらよいのかな。

C りの下だよ。

T そうだね。そうすると、のが一番上にきて、りがきてこが一番あとにくるんだね。

T それじゃ。また、変身させちゃおう。どれかの字を、他の字にとりかえると、誰かになるよ。誰だろう。

C りを、うにとりかえちゃうと、のうこ……。

C あ、さかさまに読むと、こうのくんだ。（進んでいる子は、長音音節にまで意識が向いていることがわかる

が、この段階では、深追いしない。）
C のを、まにとりかえると、まりこだ。（本人が気づいて、発言。）
T よくできたね。それじゃ、つぎのに進むよ。
＜Ⅲのカードを提示＞
C いしだ。
T どうすると、いしだくんになるのかな。
C いを上にやってね。しをまんなかにやってね。だを下にもってくる。
T そうだね。他の人に変身させられないかな。
C しを、いにとりかえて。
C うしろに、いを入れて、いいだくんだ。
C あっ、ぼくのいも入っているよ。
（ぼくのいというとらえ方は、音が用具として、完全には、意識されていない。）
T じゃ、この人は、立って下さい。
＜飯田と石田起立＞
T このつぎは、何かな。
＜Ⅳのカードを提示＞
C いを上にやって、ずをまんなかにするの。そうすると……。
C いずみくんになる。
C いいずみ先生。
T だれに、変身するの？
C もうひとつ、いを入れれば、いいずみ先生になる。
T いを、どこに入れるのかな。
C いと、ずの間。
C いの上でも、同じだよ。
T それじゃ、もう一度、だれになるか聞かせて下さい。
C（全員）いいずみせんせい。
（同音の連続が、二音節になることを、発声で確認）
T いを、ひとつとると……？
C いずみくん。（ほぼ全員）
T それでは、次は、だれになるかな。
＜Ⅴのカードを提示＞
C やまだくん。
C ぼくは、ますだくんだもん。
T どうすると、やまだくんになるのかな。
C やまだだよ。
C ぜったい、ますだだよ。ぜったい。
（ぜったいと言いながら、こだわっているところが、音節と自分とのかかわりがうかがえて、おもしろい。）
T みのわ君の声を聞いてみようよ。
C やを入れるの。そうすると、やまだくんになる。
C そう。やを、一番上に入れるの。
T やまだ君。立ってみて。
C あれっ。だが、まんなかにくるの？
T やだま君になっちゃったね。
C ああ。だが、あとにくるんだ。
T この人は、まだ、変身できますか。
C ますだくん。
T ますだくんに、どうしたら、変身できますか。
C やを、まにかえるの。
C ままだって。
C ままだだって。
T これでいいのかな。
C まんなかの、まを、すにかえるの。それで、ますだだよ。
T まだ、変身できる人が、いるんだって？　ここから、変身できる人、立って下さい。
C すを、つにかえるの。
C つを上にして……。
C つまだだ。
T ちょっと、まちがっちゃったね。
C つと、まを、反対にするの。
＜まつだに、修正＞
T まだ、変身させて下さい。
C だを、きにかえるの。
C あっ。まつきさんだ。
T この人は、一番はじめは、誰だったのかな。
C やまだくん。
＜以後、変身の跡、音節の移行の跡を確認させる。＞
C＜ますだくん→まつだくん→まつきさん＞
T 何人に、変身できたかな。
C 四人も、できた。
＜Ⅵのカードを提示。個別にも、手持ちカードを配布＞
T このカードで、このクラスのだれかさんを作って下さい。
C せんださん。
（本人、まだ、気づかず）
C せんだ。おまえだ。
T せんださんが、できたかな。何の字を入れたのかな。
C んだ。
T この人から、だれかに変身できる？
C できるよ。
C ごんだだ。
C ごんださんだ。
C せを、ごに入れかえるの。
T 次の問題に、いくよ。

＜Ⅶのカードを提示＞
＜すぐさま＞
C いがわーっ。（ほとんどの児童）
T だまって、手をあげて…。
C いがさいしょにきて、がは、つぎにして、わをあとにする。
T この人から、まだ、変身できるかな。
＜九名　挙手＞
C いながわさんになる。
T どうすれば、いながわさんに変身できるのかな。
C いとがをはなして、なを入れる。
C がを　ばにかえるの。
C いなばわー？
C わを、とっちゃえばいいんだ。
T がとわをとっちゃって、ばをつけるんだね。三人に変身できたね。
＜Ⅷのカード提示＞
C あっ。なかむらだ。
C なを入れれば、いいんだ。
C なを入れると、なかむらだ。
T まだ、変身できるんだけどなあ。
C なを、わにかえると、わかむらだ。
T それじゃ。ちょっと、むつかしくするよ。この字をつかってね。このクラスにはいない人の名前がつくれないかな。
C かむら。だって、ぼくのともだちにいるもん。
T ほかには……。
C なかむら。
T もっと他の人になりませんか。
C むからかな。
（このあたりで、音を用具として形式的に組み合わせを意図してみたが、生活体験・実像と離れ切れずに、苦しんだ。）
T 次の問題に、いくよ。
＜Ⅸのカードを提示＞
C うをまんなかにして、こをあとにする。
T しんがゆうこちゃんになったね。これから、また変身できるかな。
C ゆを　こにする。
C こうのにならべるの。
T ぼくの名前、私の名前になるという人はいないかな。
C こを　うにするの。
C ゆううだって。
C ゆうしろうだ。
T ゆう□の□にだけ。ひとつだけかえてごらん。
C あっ。ゆうじだ。
T じゃ。これを、とりかえないで、変身できるかな。
C こうじだ。
T 字をとりかえないでだよ。
（ちょっと、苦しがったので、りゅうじを提示）
C だって、ゆがちいさくないんだもん。
T さ。今度は、人の名前じゃないよ。
＜Ⅹのカードを、個別に配布すると同時に黒板に提示＞
T このカードから、ことばをつくって下さい。
C すみれ。
C するめ。
C すずめ。
T すと、れを使ってだよ。
C れたす。
T できたね。ずとれを使って、他にできるかな。
C れーす。
C 下に、ぼう（ー）をひくの。
C いを入れるの。
T ーを引くのと、いを入れるのとちがいは、あとで勉強しょうね。
T それじゃ。次に進むよ。みんなのカードの中に、だいがあるね。この三つで、ことばを作って下さい。
C かたい。
C いかた。
C ゆかたはあるけど、いかたなんかないよ。
C かた。
T いは、どうしたのかな。
C たかい。
C かたい。
C いたか。
T これで、四つもできたね。
T もうちょっとやってほしいけど、この次にしょうか。
C つかれてないよ。やろうよ。
C たかい。
C たいか。
T たいかって、どういうことかな。
C あのね、大昔の鳥なんかがね。とべなくなって、羽とかが、だんだん小さくなっちゃうの。
C 大きい火事のこともいうよ。
T 先生はね。魚屋さんにいってね。これはたいかって聞く時のことも考えたんだよ。
T じゃ。この続きは、この次に勉強しょうね。よくがんばりました。
C これで、勉強を終わります。

（横浜・汐見台小・教諭）